
学会ニュース

日本女性学会

第27号 1986年1月

目 次

- 女をとりまく「美」について —— 美のくさり ——駒尺 喜美..... 2
- カンパのお願い 5
- 研究報告会のおしらせ 6
- おしらせ 6
- 幹事選挙に関する内規 7
- 寄贈図書・資料 8
- 会 員 消 息 8
- 編 集 後 記 9

女をとりまく“美”について

—— 美のくさり ——

駒 尺 喜 美

12月7日、大東文化記念会館で発表したことを要約せよということなので、この文章を書きました。私はこの6月に女の美について一冊の本をつくりました。「女を装う」という本です(勁草書房)。タイトルは迷彩をほどこしてありますが、内容は女にとって、“美”とは何かということ、相当きびしく問いつめたつもりです。つまり、これまで女性美とされてきたものを、女性学的にアプローチしようとしたのです。5人で分担しましたが、私の担当は“女性美”を貫ぬく論理を見つけること、いわば原論といった部分でした。これまで女の服装について研究したこともなく、その方面の知識もないのですが、例によって例の如く、無手勝流で進めました。

これが私にとっては結構面白かったし収獲にもなりました。そこで、女性学会の研究発表を依頼されましたこの機会に、報告させてもらいました。以下その要約です。

1 助 走

性差別は、数ある差別の中でも、最もやっかいな差別、見えにくい差別だと私は考える。

なぜ見えにくいのか。それは別仕立のルール、別の土俵が与えられているからだと思う。同じ土俵の上での差別は分り易いが、始めから別の土俵にのせられてしまっているのだから、差別も差別とは見えず、区別に見えてしまう。区別と云いくるめられてしまう。このことはダブル・スタンダードの問題や、性別役割分担の問題としてすでにいろいろ取り上げられているが、しかし本当にすみずみまで取り上げられ、検討されたであろうか。つまり差別の実体が本当に見えているのだろうか。

一口に、ダブル・スタンダードと言ってしまうと、その言葉で二重規準の実体や総体がすべて分ったようなつもりになってしまうが、この差別の仕掛けはとてつもなく大きなもので、人生のすべてを被ってしまっているから、つまり、余りにも大きいから私たちの目にはかえって見えにくいのではないか。例えば、全地球をおおうような大きなアミがかぶせられていれば、そのアミを見ぬくのは困難なのとちょうど同じである。

女の道と男の道という二本の大道は、余りにも大きい体系をなしているから一朝一夕には解きにくい、見えているところだけで考えても、生き方という全人生を規定されるような面から、日常生活の立居振舞、手の使い方、笑い方、声の出し方といった細かい点に至るまで見事な二本道によって構成されている。このモラルから美意識まで貫ぬく二筋道は、結局のところ何を意味

するか、何をつくり上げているのかといえば、それは鮮やかな身分制度をつくり上げるための仕掛けである。

私は、女と男の関係構造を、齒に衣を着せずに言えば、巧妙なる身分制度だと思う。そして、その身分を、常時、外形で表す仕掛けが女の服装である。

Ⅱ 女性美の本質を探る

女性美とは何ぞや。それを探るために私は二つのモデルを選び出した。東洋のてん足と西洋のコレットである。

① てん足について。まず、その起源や理由、⁹施術の方法など、想像以上に残酷かつ醜悪なことであったのを述べた。どのように怖ろしいことでも、ある時代のある地域に定着してしまえば、その社会に住む人たちには、あたかも当然のこと、自然のこと、美しいことと見えてしまうことの怖ろしさ。足指の骨を裏側に折り曲げる手術をされ、一生涯、人に頼らねばならない存在におとしめられている姿。それを女の美とされている屈辱。この二重三重の屈辱にもかかわらず、それをされている当人もそれを誇りとし、自ら歓迎して受け入れてしまう仕掛け（意識操作）の怖ろしさなど、例をあげて語った。

② コレット。これもてん足に負けず劣らず怖ろしい仕掛けである。始めは鋼鉄製の胴じめでウエスト 37cm から 40cm を誇った(?) そうである。女たちは骨折や病におかされ、失神するのも珍らしくなく、内臓の位置も変化するほどであった。つい最近まで、高校で女は胸で息をし男は腹で息をすとの学説(?) を、まことしやかに教えていたくらいである。この場合もその怖ろしさは、身体の変形だけではなく、精神の変形（意識操作）まできたしていることである。医者もコレットをはずすということが言えない、否、発想すらできぬようになってしまっていたことである。女の美はモラルとはりつけられているからコレットをはずせということは、娼婦になれということの意味したからである。

以上の両者とも、女の身体をしばりつけて変形させ、それを女の美しさ、女の貞淑の証しとした。ここで一つ分ることは、美にしる貞淑にしる、「女らしさ」とは、女の自由をうばうこと緊縛することであることだ。そしてそれは、専ら男性優位社会の要請により考案されたのであること、男たちの都合に合わせてつくり出されたのである。てん足もコレットも、男たちが女を自由に扱えて、しかも性的慰みものとして煽情性を高めたいとの要求の産物であった。

それにしても、このように身体を加工するという巧妙な方法をどうして思いついたのか。それについては、家畜を拘束して、自己の使役に便利のように、綱をついたり鼻に輪をはめたりしていたところから思いついたのだろうという説がある。事実、女は家畜と同じように男たちの財産であり所有物であったのだから、この説は当たっているかもしれない。いずれにしる、18 世紀

の終り頃でも、ロンドンのスミス・フィールド市場では家畜と同じように妻が売られていた。それも首に綱をつけて。

Ⅲ 女性美の本質に迫る

てん足とコルセットを範例として用いたが、これは大昔の遺物ではなく、現代まで立派に続いている。てん足はハイ・ヒールとして、コルセットはボディ・スーツなどになって。やせたい病や距食症の悲劇も、この文脈の上でおこっていることである。それ以上に、てん足やコルセットの発想は、女を家に囲い込んで、社会的に閉じ込め経済的にお足をうばうこととして、堂々と今日まで続いてきていることでもある。見事な一貫性、見事な体系である。

結論として、女性美、女装の本質を要約すれば次のようになる。

①拘束性、緊縛性

②露出性（胸明、首明、足を出すなど、イブニングからスカートまで）

①②は、しめつけと開放とで一見対立するように見えるが、決してそうではない。いずれも、弱体化を意味するし、当人にとっては不自由だが外からは自由にしやすいのである。無防備にして、他者の立入りは自由というスタイルである。これは考えてみれば、降伏のスタイルである。無防備にして立入り自由の表明は動物の場合でも降伏のサインである。服従のサインなのである。

更に言えば、拘束プラス露出の入れものとは、原理的にいえば監獄スタイルである。本人は拘束され自由をうばわれているが、外からはいつでもものぞけるし立ち入れる。

始めに言ったように、男らしさ女らしさの二筋道、区分制度は、身分制度そのものだと私は考える。それは政治、経済、社会、風俗習慣を貫ぬいている。残念ながら、愛も美もその例外ではない。服装も、むろん身分制度を反映している。おしゃれに遊びに、あるいは自己表現の一種として、イブニングでもスカートでもヒールでも、振り袖でも、さまざまに装うことは、言うまでもなく全く自由である。しかし、一度はきっちりと、「女装」が身分制度の産物であることを、目をそらさずに見ておきたいと思う。

幸いにして、今日では男装女装の区別はうすれ、クロス・オーバの方向に向かっているようである。が、これも身分制度の消滅をめざす女性解放の世界的な波と、ひとつづきのことである。

＊ ＊ ＊

追記

「女を装う」を原案として、去年の6月に東京の労音会館で、「女のルネッサンス」と題してショーを上演しました。オバンダーズ主催で、脚本をつくり、ミュージカルをめざして、50余人

の女たちの参加で上演しました。テーマソングもオリジナルで、後半には華麗(?)なるファッション・ショーをくりひろげました。好評で一回切りでは惜しいといわれ、アンケート用紙に百冊のフェミニズムの本を読むよりもこのショーの方が素晴しかった。高校などあちこちに持って廻ったらと励ましの言葉を下さった方もありましたので、スライドにしました。スライド150枚とその上演のためのテープを一組としてつくりました。この研究発表会の日に、そのスライド上映もあわせて行いました。

貸し出し 個人3千円、組織5千円です。

興味のある方は私の方までお申込み下さい。

カンパのお願い

学会ニュース25号でお判りの通り、日本女性学会は慢性的に財政的なピンチ。名目上赤字を免れているのは、会員の念願とする学会誌発刊のために積み立ててきた繰越金をとりくずして充てているため。これでは足元を掘りくずしているようなもの。学会活動の活性化のためには財政的裏づけがどうしても必要。そこで85年度総会は年会費を1,000円アップして5,000円とすることを決めましたが、これでも学会誌の準備金のプールはおろか、幹事会に出席する幹事の交通費(現在、出席幹事の新幹線分の片道。たとえば東京で開催のときは関西、中部地区から出席幹事のみ支払います。総会時に合わせた幹事会はすべて自己負担)の支給もビクビクもの(幹事の出席率がよいと財政的アップクとなるし、関東在住の幹事の方がやや多いため、関東、関西の交互に開催することもムズカシイ。もっと遠距離の人が幹事に選出されたら、交通費の保障ができたか否か)、といったところです。自分たちの活動は自前の資金で、ということで、海外のフェミニストグループは、収入(自己申告による)の一定率を納めているとか、60年度総会の席上で加藤春恵子さんから出された御意見ほか、をもとに幹事会ではこんなお願いを申し上げることになりました。

日本女性学会の活動の活性化のために、あなたの収入とライフ・スタイルに応じて御寄付をお願い申し上げます。振込先は、会費と同じく

です。

なお、事務局では受領しましたという証に領収証を発行いたします。

研究報告会のおしらせ

テーマ コミュニケーションの現象学
 報告者 加藤 春恵子
 司会 溝口 明代
 開催日時 2月8日(土) 午後1時半～4時まで
 会場 京都市立看護短期大学

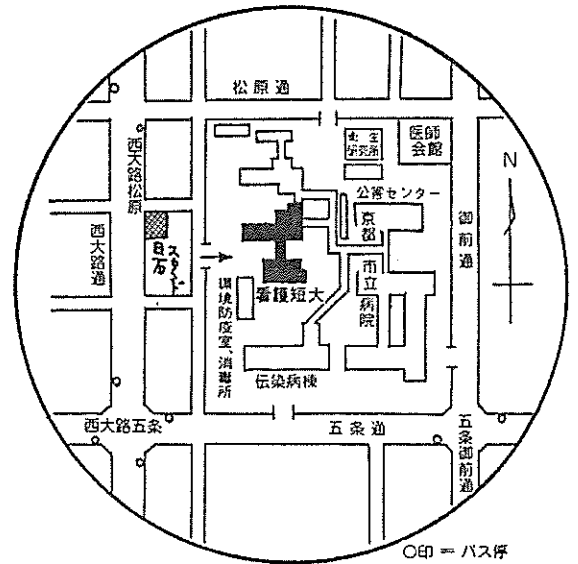
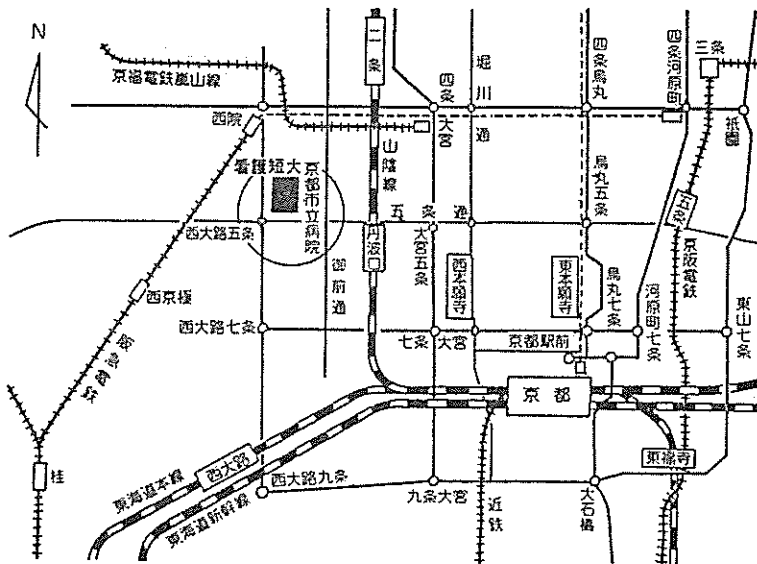
京都市中京区壬生東高田町1の2

TEL (075) 311-0123

交通 阪急西院駅下車南へ徒歩10分東へ1筋入る南角

京都駅より市バス205番・金閣寺行乗車・西大路松原下車東入る

なお、会の終了後は幹事会(公開)が行われます。どなたでも御参加下さい。



おしらせ

去る12月7日・8日の幹事会で来年度の総会関連行事(研究報告など)についてのアンケート、
 および、会員相互の交流をはかる目的で、昨年中に各自が行った研究や活動について伺うこと
 になりました。お手数とは思いますが、同封の調査用紙に必要事項をお書きください。また、名簿
 作成のため住所などに変更のある方は、その旨おしらせ下さい。

〆切り 2月15日まで。(名簿は幹事の選挙に必要です。)

1986年度は、幹事の改選時期にあたります。

本会では、先の改選期に、暫定的な選挙規定を設けましたが、このほど具体的な規定が提示されましたので、お知らせします。

幹事選挙に関する内規

1. 選挙人資格について

選挙人資格は、会員名簿に記載されている者とする。

2. 被選挙人資格について

被選挙人は、会員名簿に記載されている者とする。

(※したがって、会員は全員が選挙人であると同時に、候補者でもあります。)

3. 幹事の定数

15名。全員改選とする。

(但し、開票の結果、得票順位15番目の者が複数出た場合には、同得票数者全員を一律に当選とみなすので、この場合に限り、幹事の定数は若干名増えることがありうる。)

4. 選挙方法

1986年1月1日現在の会員名を、1986年度の会員名簿に記載する。この名簿をもとに、選挙人は10名を選び投票用紙に連記し、返信用封筒で事務局へ送付する。10名を超える氏名を記入した投票は無効とみなすが、10名以下の氏名を記入した投票は、何名記入されていても記入されている者は全て有効とみなす。

5. 選挙の告示および投票期日

1986年2月下旬に、会員名簿と投票用紙および、返信用封筒を各会員に発送することをもって、選挙の告示とする。

投票締切日は同年3月20日(当日消印有効)とする。

6. 選挙結果と当選者の決定

1986年3月末に選挙管理委員会を開催し、開票する。選挙管理委員会は直ちに当選者全員の諾否を問い合せ、その結果辞退者が出た場合には、定員に達するまでの範囲に次点者を繰り上げ当選とする。

選挙結果と当選者(新幹事)名は、開票後の最も早い時期に発行される「学会ニュース」の紙面で、全会員に公表するものとする。

7. 選挙管理委員会

現幹事会が代行する。

8. 新幹事の任期

1986年度総会から、1988年度総会までとする。

9. その他

この内規は、今回の選挙に限り有効とする。

※会員名簿を作成するため、1989年度名簿記載事項に変更のある方は、至急事務局までご一報下さい。

以上

寄贈図書・資料（～12月12日）

- ラテンアメリカ 社会と女性、国本伊代・乗浩子編、新評論（執筆者御一同より）
- 月刊婦人展望 '85 11・12、市川房枝記念会出版部
- 思想の科学 離婚・子どもの放つ意味、№53
思想の科学社、（田中由布子さんより）

＜ 会 員 消 息 ＞

住所変更

國 信 潤 子 さん

住所訂正

田 中 由布子 さん

お詫びと訂正

ニュースレター第26号で「女子労働の問題」の報告者小林普子さんのお名前が晋子となっておりましたので、お詫びして訂正いたします。

編 集 後 記

去る12月7・8日の両日に行なわれた合宿では、少ない参加者にもかかわらず、熱心な話し合いが行なわれました。

本会発足当初とは「女性学」への理解がいくらか変化している社会状況をふまえて、本会の内部からの改革をめざすとともに、「女性学」のイメージを創っていこうということになりました。また、さらに会員相互の交流をはかる一方、各会員が研究報告会の参加や発表の可能性をほりおこすなど、地道な活動を行なっていくことが確認されました。そのため、今回は、ニュースレターに色々なアンケート用紙が入って居りますが、どうぞ御協力下さい。

厳寒。今年の風邪は長引きます。どうぞ御自愛のほどを。

(亀山)

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見レポート等を受けつけておりますので、御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方はコピーをおとり下さい。

発 行 日 本 女 性 学 会

〒 350 川 越 市 三 久 保 町 13-1 川 越 郵 便 局 私 書 箱 35 号

(郵 便 振 替 口 座 東 京 8-49189
住 友 銀 行 日 本 橋 支 店 普 通 口 座 451169)

